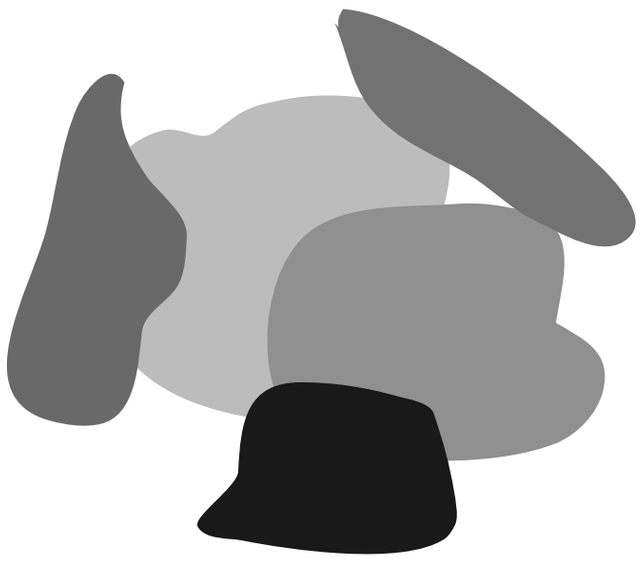
月　刊

Mélange

Vol.160



2021.3.28

詩と評論

月刊「Mélange」
Vol.160.2021.3.28
「月刊めらんじゅ」編集部

「月刊めらんじゅ」160号　目次

詩・俳句

待ちぼうけ　……高谷和幸　3
水音　……黒田ナオ　8
待っている　……にしもとめぐみ　8
雑用係／おんがく……中嶋康雄　9
あいつも死んだこいつも死んだ……野口裕　10
いくたびの鉄の橋を／みなしうたが聞こえる　……木澤豊　11
その水路……大橋愛由等　12
脇道ソネット　……大西隆志　15
残雪　詠（俳句）　……岩脇リーベル豊美　15

評論

連載３回目／「想像力の彼方」……大西隆志　14

連載小説

３回目／「海の見える丘」……高木敏克　4
３回目／「海猫堂店仕舞記」……千田草介　5

連載エッセイ

「3月末日生まれ」……モス堀渕敬子　6
〈本のひと皿〉「コンビーフよ永遠なれ」　……安城位久緒　7
益田っこ通信58号「ころな禍の平和の鐘」……元正章　13
神戸詞（うた）あしび148〈排耶書〉に込められたまなざしを考える……大橋愛由等　16

編集部だより★81／3月となりコロナ事態は少しずつ変化している。同じ兵庫県下でも、神戸市、芦屋市、西宮市、尼崎市以外の飲食店は、県からの時間短縮要請が解除された（姫路市ではさっそく飲食店が通常の営業を再開していると聞く）。先の４市は３月末まで時短要請期間が続いている。街には人出がすこしずつ戻ってきているが、午後９時までの時短要請に従っている飲食店が殆どのために、夜遅くまで飲食を望むひとたちの難民化は解消されていない。特にサラリーマン諸氏は寄る辺なく、コンビニで缶ビールを買ってきて路上で立ち飲みする姿も見られる。人間とは環境に順応していくものなのである。しかし４月以降はふたたびコロナの第４波が押し寄せることが予想される。ワクチンへの高齢者に対する接種は大きな都市ならはどうやら5月以降にずれこみそうだし、一般人に対する接種はさらに遅れて夏以降になるのではないか。いま外出するときに必須の装着具となっているマスクはしばらく外せそうにない。変異種も拡散していて、不安を抱くひとはさらに不安を増殖させている。こうして2021年は去年に続いてコロナに翻弄されている。いまはコロナ事態の真っ最中だが、いずれポストコロナの時期がやってくる。今の当たり前（マスク装着、ソーシャルディスタンスなど）のいくつかが継承されて〝常識〟となっていくだろう（もちろんその反発も生まれでてくるのだが）。／3月の「Mélange」例会の第一部読書会のチューターは、詩人の近藤久也氏。語るテーマは、「私の中の詩とアナキズム」。事前に寄せられたメッセージの中には「アナキズムは政治思想（イデオロギー）ではないということ。むしろ反政治で非政治。反体制ではなく反権力。」と。（大橋愛由等）

◆待ちぼうけ

高谷和幸

「太陽のように」。文字以外のものを理解することは出来ない。そのために文字からそのかたちを切り離すことは不可能である。一方で、文字以外の技術や行為は包摂する時間を取り込む複数の視点が絡まった関係にあると考えるのは過ちを徒に誘発する。エントロピーで考察するならば正と負の領域が同時に存在している。「日が昇り、陽が沈む」。この所為が朝と夕のものではなく、文字に同時に存在する所詮と能詮である。モデリングすると心理学が表層化するときにその論理を失うように、指先の転倒した狂気が失うものがある。空白が文字を吸い寄せると聞いたことは本当だろうか。文字は身をよじり集まってくるらしいが信じ難い。何万とあるうちの一本の矢を放つと、暗闇のなかに吸い込まれるように射貫くはずの一つの点に到達する。そのように言葉は推敲されるべきと言われる。櫛の形状をしたものが文字を梳いていく。そのSCの世界では、時間さえ待てば水が熱せられて氷に変わる。時間は近似値に過ぎない。このアナグラムが表象するのは、宇宙は何時着くか分からないバスを待つことだと言っている。

※SCはストカスティク演算の略。近似計算法のひとつで、数値を確率的に表現し演算する手法である。

連載小説

海の見える丘③

高木敏克

2　狼山

お父さんから聞いたという山麓鉄道計画を教えるために堀田千鶴子が家にやってきた。

「へえ、その線路どこに通るん？　一緒に見に行かへん？」

堀田千鶴子ちゃんを森の中に連れて行こうとしたら、母からひどく怒られた。二人でお医者さんごっこをしていたのを見られた数日後だからだった。でも、本当は母と新開地で観た映画のフレンチキッスをしたかっただけだ。

昔の山は女人禁制で、それはそれなりの理由があったのだ。森の中には女の子を好む魔物が潜んでいるのだ。それでも、わたしは魔物になってでも千鶴子ちゃんを森に連れて行くことをあきらめなかった。

「何があってもぼくと森の中に入ったことを言ったらあかんで」

千鶴子ちゃんは「ウン」とってついてきた。僕にはどうしても見せたいものがあった。森の大聖堂の中に池が見えてきた。

「池だ」千鶴子ちゃんの声が森の闇を突き抜けた。すると、もう一人の少女が光の中ではしゃいでいるのが見えた。金色の輪郭を降り注ぐ光の逆光の中で輝かせた。この森では不思議なことが起こる。

もう一人の少女は妖精だ。千鶴子ちゃんの影法師が消えていた。影法師は解放されて光の中の白化現象で妖精になったのだ。森の闇は消えていた。闇は真っ青になって流れていた。真っ青な水脈は泉に吹き上がり、再び地下水脈となって湊川まで流れてゆく。少年のわたしはこの水を飲んでいるせいで神撫の記憶が遺伝しているように伝わってきた。誰から聞いたわけでもなく、森の記憶はわたしに確かに遺伝していた。

「逃げろ、誰かが来る」とわたしは叫んだ。ササ、ササッと薮をかきわけてやってくる者の背丈はわからない。それほど笹は高かった。真っ暗闇がこちらに向かって押し進んで来た。

「池ジャナイヨ。コレハ、イズミダヨ」と外国人の声がした。

顔が真っ暗に見えたのは、怖くて顔を見ていなかったからかもしれない。男はそのまま立ち去ってしまった。

背中には大きなリュックサックが見えた。

「町から来た人だよね」と僕は自分にも言い聞かせるようにいった。

「でもねえ、影法師が人間をおんぶしてるように見えたよ」といってから、千鶴子ちゃんは、怖くてちびりそうになったのだ。

「おしっこがしたくなった」といって笹薮の中に消えてしまった。

泉に戻ると、彼女は対岸でお尻を出していた。小さな一筋が地面を這っていた。

その一筋が池の表面に達すると森の様々な生物が目を覚ました。ドボンと池の底に逃げるもの池の表面を飛びはなるものもいたが、光を放つものもいた。水根という水生植物はほんのりとした白い花を揺らした。

「なんで後ろ向きになって、しっこするんや？」

「だって、暗闇から何か出るかもわからんやん。だから」

「ぼくがおるから大丈夫やて」

「さっきの男の人は、本当に真っ暗だったね」と彼女は言った。

「あれはねえ、真っ黒というんや。進駐軍の黒人兵だよ。お母さんと新開地に行った時にたくさん見たよ」

と、わたしはつぶやいた。振り向く千鶴子ちゃんの顔は白くて可愛かった。

「ここには、おじいちゃんとおばあちゃんと、そのおばあちゃんと、そのおじいちゃんのお墓もあったんやて」

この言葉は子供心にも悲しかった。船で死んだお爺さんの墓場が何処にもない。死体がないからお墓は何処にもない。

「ええ、ここにお墓があるのに、なんでほったらかしにしとん」と我慢して千鶴子ちゃんに言ってやった。

「新しい鵯越のお墓に引越ししたんよ。さらのお墓やから、すごくきれいよ。ここはお墓のお墓や。知らへんの？ここはうちの山よ。勝手に入ったら木に縛り付けて狸に食べさせるとお兄ちゃんが言ってたよ」

「へえー　山は神さんのもんとちゃうん？」

「ちゃう。うちの山やで。そやから、おとうさんは売ることもできるんや」

「神さんに内緒でそんなことしたら祟りがあるんとちゃうん」

「神さまにもお金を払ろてるから、大丈夫やて」

「どこで」

「長田神社」

「でも、誰に売るん？」

「この山は、神戸市に売るんやて」

「そんなことしたら、きっと祟りがあるわ」

「そんなこと、誰が言うとん？」

「高取さんの神主さん」

「うそや」

連載小説

海猫堂店仕舞記③

千田草介

海猫堂の店の奥はどうなっているのだろう。突き当りが見えない。うなぎの寝床どころか、六甲山をつらぬく隧道のように遥か彼方へ続いている。しかも幾本もの横穴もあるらしい。

「手前から五本目の横道へ曲がって入っていったらええ」と、チャンドラが言った。「角に〈なんどいや横丁〉と目印の看板が付けてある」

「なんどいや横丁？」

「長崎ばってん江戸べらぼう大阪さかいに京どすえ兵庫神戸なんどいや」猫が右腕をさしあげ、指折り数える仕草をした。「な、五番目やろ。片手で数えられる。ただ、気イつけや。行き過ぎて六本目の播州〈べっちょない〉に入ってもまあ命に別状はないけども、七本目の福井〈しねしね〉に入ってしもたら万事休すや。これは地震の壊滅つながりでな、福井地震と阪神淡路とのな。もっとも、いちばん手前の〈ばってん横丁〉へ間違うて入っても、奥の突き当たりのとこで〈なんどいや〉とつながっとるよって、迷子になる心配はいらん。なぜかというと、

〈長崎から船に乗って　神戸に着いた

という、ふざけた歌があったせいや」

「どういうこっちゃ」私はもう、猫の話に頭がついていかなくなっている。

「まともに考えてみ。長崎から神戸に来るのに、なんでわざわざ船に乗らんならん。北へまわって玄界灘から関門海峡ぬけて瀬戸内海を通るんか。それとも鹿児島の南をまわって土佐沖から紀伊水道に入るんか。そんな悠長な回り道せんでも、夜行特急一本ですむ話やないか。飛行機なら長崎空港から神戸空港までひとっ飛びで来られる」

「おまえの言うとおりや」私は兜を脱ぐ思いであった。「なんで気がつかなんだんやろ」

「〈まともに考えられん病〉が人間のあいだにはびこっとるんや。そのせいで人の世はギスギスして平和におさまらん。この店はそんな人間世界の心の矛盾が地球物理現象と相俟って入り組んだ坑道を形成しとるわけや」

どうせ私以外の客がこの店にひやかしに来ることはなかろう、順路をまちがえないよう案内してしてやると、チャンドラは椅子からおりて私に尻を向け、奥へ歩き出した。

猫主人が言ったとおり〈ばってん〉〈べらぼう〉〈さかいに〉〈どすえ〉の表示の次に〈なんどいや〉の横道があった。その入り口に、禿げ頭で上半身裸の男が坐っていた。

（つづく）

〈三月末日生まれ〉――モス堀渕敬子

私の誕生日は3月31日。4月1日生まれの人には出会わなかったので、たいていクラスで一番若く、そして一番小さかった。

おまけにやせていて、大阪の小学校低学年の頃は栄養失調の疑いをかけられて、親が学校に呼び出され恥ずかしかったと、のちに母は言っていた。ある先生からは「今にも折れそうな足」と言われたのを鮮明に覚えている。そして背が低すぎてプールの底に足が届かず水泳が苦手だった。

小学4年の時に大阪の下町の学校から兵庫県西宮市の住宅街にある学校に転校した。5年と6年の担任の先生からパワハラまがいの扱いを受けた。身体が小さいので一番前の席にすわらされ、先生の質問に答えられないと、頭の上から拳骨でなぐられた。それがトラウマになってしまって、長い間「わかりません」と言うのは悪いことだと信じていた。あてずっぽうで言った答えが間違っていて、友達に迷惑をかけてしまった経験もある。

この頃は少女漫画に夢中になって勉強そっちのけで漫画を読んでいたので成績はよくなかった。おかげで先生に目をつけられていた。

6年の修学旅行で伊勢神宮に行ったとき、夕食終わりの頃その先生が、「箸を置きなさい」と言ったので箸を置こうとしたら「堀渕、箸を置けと言うのが聞こえんのか！」と学年全生徒の前で名指しで叱られた。一瞬遅れただけなのに……楽しいはずの修学旅行は二度と思い出したくない旅行になってしまった。その先生は劣等生には冷たかったし、少しでも枠からはみ出す生徒は容赦しない典型的な管理教育者だった。

中学生になってもクラスで一番小さく、同級生から「チビ、チビ」とからかわれた。

中3になってやっと背が伸びてきて3年間で15センチ伸びたが、やはりまだ小さい方だった。しかし、成績は伸びていた。

私の通った高校、西宮市立西宮高等学校は毎年夏の甲子園大会の開会式で女子生徒がプラカードガールを務めることで有名だ。当時は主に3年生が担当していたが、身長155センチ以上というのが基準だった。その頃の私は155センチなかったが、昭和48年は第55回記念大会でいつもの年より多くの人数が必要だったので、大会旗を持つ係として開会式に参加することができた。ラッキーだった。

高校では2センチぐらいしか伸びなかったし、浪人中は1ミリも伸びなかったが、大学で馬術部に入ってよく食べよく運動した結果、19歳から20歳にかけて2センチ伸びた。

浪人してみんなと年齢がかわらなくなったと思ったのも束の間、就職難だった。やっと最後に電化製品量販店に採用されたが、1年ちょっとでやめてしまった。

何回か転職したが、男尊女卑で女性を年齢で区切って評価する日本の男社会にはうんざりしていた。恋愛にも失敗し、弟や妹の方が先に結婚してしまった。当時の日本社会には「クリスマスケーキ」という言葉があり、女性は25歳を過ぎるとパタッと〝売れ行き〟が止まるというのだ。私が結婚したのは33歳。いまでこそ33歳で結婚するのは普通だが、その当時まわりの友達はみな20歳代で結婚して、30過ぎても独身なのは私ぐらいだった。

子どもができなかったこともあって20歳代で結婚できなかったことにはずっとコンプレックスを持ってきていた。特に、同級生の男子でも、大学時代に相手を見つけて20歳代前半で結婚したと知ったときには……それにひきかえ私は大学時代に失恋して2年間立ち直れなかった。その後も後遺症が残ってうまくいかず、ふられてばかりだった。私が日本人と結婚しなかったので文句をいう人もいるが、文句を言いたいのはこっちのほうだ。

結婚が遅かったのをずっと悲観していたが、昨年高校の同級生女子数人と久しぶりに会った時、そのうち数人が34歳で結婚したのを知った。2人ともとても素敵なのでどうして結婚が遅かったのかわからないが、私と似た年齢で結婚した人がいるのを知り安心した。

別に劣等感を持つ必要はないのだと、夫と出会うのにそのくらいの年月が必要だったのだと思うことにした。

自分は3月生まれ。成長も結婚も遅いスロースターターで、なおかつマイペースな人間だとあらためて感じている。

本のひと皿

コンビーフよ永遠なれ

安城 位久緒　Anjo Ikuo

コンビーフといえば缶詰だとばかり思っていた。子どもだったころは台所の戸棚や床下収納に、ホワイトアスパラガスやコーンの水煮、みかんや黄桃のシロップ漬の缶詰といっしょに詰め込まれていて、忘れたあたりの日曜、朝食の一品になる。

思い込みが違っていたのは、コンビーフにも、ナサニエル・ホーソーンの人物像にもあてはまる。古い教科書にあった「人面の大岩」、アメリカ文学の古典として嫌でも接する『緋文字』といった小説は、体裁だけの善悪を超える、人間の尊厳や倫理を荘重に描きだす。ひたすら生真面目、禁欲的に、薄暗い書斎でペンを走らせた人かと、うっかり想像していた。無味無臭ではなくても、せいぜい乾いたパンの味と、古いひきだしのにおい程度の、浅はかな作家観であった。

ホーソーンの伝記的な記録を読めば、人づきあいの苦みや甘みも、家庭生活の日なたのにおいもする。一八四四年五月末の手紙には、愛妻が不在のあいだ、料理書を見ながら食事を整えるくだりがある。「いまはコンビーフを見張っているのだけれど、ぼくにしてみれば時のはじまりから延々と火にかけているのに、最後の審判の日までにできあがる気配もない」。欧米での本来のコンビーフは缶詰ではなくほぐしてもいない、塩漬けされた牛肉の巨大な塊であるのもよくわかる。幸い「若いご婦人のこころほどに」柔らかく煮あがって、二日後の手紙は上機嫌だ。「実をいうと、食べるなど不遜ではないかというぐらい、それなりに大した傑作だと思っている。これほど配慮と手間をつぎこんだものは、まちがいなく、不朽であるべきだよ」。肉質硬めのブリスケット（肩ばら肉）で作ることが多いから、じっくり煮込んだぶん、うまみもひときわ増していたはずである。

そこまで賞賛され、歴史に残るとは思いもよらなかったのは、キャベツとの組み合わせも同様だろう。アイルランドの守護聖人、聖パトリックの祝日である三月十七日は、現在では日本も含め世界のあちこちで、緑の服とビールでのお祭り騒ぎだが、アメリカに限っては「コンビーフとキャベツの日」でもある。アイルランドで一般的だった肉と野菜の組み合わせといえば、豚肉の塊を燻したベーコンと、じゃがいも。ところがニューヨークにたどりついた移民労働者は、ユダヤ系移民を通じて、ベーコンより手頃でおいしいコンビーフに出会った。じゃがいもより経済的なキャベツとあわせて煮込んだところ、安く手早く、簡単にたっぷりできてうまいだけに、全米にひろまる。一八六一年三月四日には、リンカーンの大統領就任式後の昼食会にまで、コンビーフとキャベツが登場した。

それでも基本は日常の料理であるゆえに、胃袋どころか、頭やはらわたを揺さぶりにかかるのが、アメリカの詩人、ジョージ・ビルジェー（George Bilgere）の「コンビーフとキャベツ」だ。詩の語り手にとっては、中西部に由来するおふくろの味。だが、思い起こす台所の母の姿は、ほほえみの鍋のふちの下で情念を煮えたぎらせ、肉を意のままに扱いキャベツを切りわける間も内奥に怒りを抱えていた。遺された、柄の壊れた包丁で料理しながら母の思いを追体験する語り手は、そんな一面も含めた人生のあれこれを、母とまた噛みしめなおせたらと願う。

もっとも、アメリカにも缶詰のコンビーフはあった。おふくろの味とはいかなくても、望外の安堵をもたらしてくれる。ただし、それは大岡昇平が、第二次世界大戦での捕虜体験を描いた『俘虜記』のコンビーフである。米軍の収容所内の食事には、米と缶詰肉の粥がたっぷり出され「戦前日本にもよく輸入されていた矩形尻つぼまり形のコーンビーフが、三人に一個添えられる」。「外には危険と困難のみあるのに反し、中には安全とコーンビーフがある」ので、脱走する者が出ない。

私の記憶のコンビーフ缶も同じ形だが、その「枕缶」はもう作られていない。鍵のような棒を使い、側面の帯をくるくる巻き取って開缶したら、スライスして食べるか、ほぐしてキャベツと炒めたものだった。大した配慮も手間もかけないが、半ば日常、半ば非日常なのが好ましい食べもの。白く固まった脂と赤身の肉が舌のうえでほぐれていく味わいは、かりそめでしかない安全や、家族の心の嵐を封じ込めていたとも思えずにいる。いま缶詰を開けたら、思いがけない何かが飛び出すのか。久々に母と食べてみるのを、なぜか迷ったままだ。

◆水音

黒田ナオ

真夜中に
目が覚めた
ぽとん、ぽとーんと
音がする

硬くて冷たい蛇口から
こぼれて落ちる水音は
布団の上にも
落ちてくる

ぽとん、ぽとーん
ぽとっ
ぽとっ

天井いちめんに
音の波紋がひろがって

ぽっかり大きな
穴が開く

◆待っている

にしもとめぐみ

年明けの寒い毎日
風と陽にさらされて
土は　ぱさぱさのカラカラ

大寒は思いの他　暖かく
雨　降り続き
地　潤う

命の芽生え
春の予感
植物は動き出す

クリスマスローズの蕾ふくらみ
薔薇の芽が萌え
ハコベやスズメノカタビラも芽を出す

地に張り付いていた
レンゲソウも立ち上がる
まだ見えない春

緑は萌え出す
毎年訪れる春に
勇気をもらう

草木の仕事
日一日近づく春の
伸び行く姿

葉を落とした
寂し気な細枝にも
届く陽光の春が

くりかえし
くりかえす
人の生きる日々

◆雑用係

中嶋康雄

雑用係がうずくまっている
ほとんど雑用も残っていない
雑用係しかいない世界で
冷めた風呂に浸かっている
しなびた裸
雑用係がうじゃうじゃいる
夢からさめても
夢からさめても
うじゃうじゃいる
蝿をたたいて待っている
「もうすぐですよ」
しめしあわされた雑用の
のりしろを計算している
「まちがっています」

雑用にまちがいがあるのだとしたら
ただしさは
どんなお皿にのっているのか
レタスはしおれているし
エビフライはひえている
ショウジョウバエがとまって
雑用をしている
お箸をのばせば
エビが海にもぐってしまう
ころもだけが
お箸にあたって裂けている
裂け目から
雑用係が出てきて
沈んだ空気を掃いている
わたしも
あなたも
雑用係だ
宇宙の果てでも
雑用係だ

◆おんがく

中嶋康雄

トイレットペーパーの慌てぶりに鎧戸が軋む
久しぶりに平方根が笑い飼っていることを忘
れていたミドリガメが目の前を歩くそれはイ
トミミズを口にぶら下げている発生と発声は
おんがくの授業のおんがくの先生のこと目の
前をあるくミドリガメほど愛しい平方根だ許
可があれば今でも土葬できる町の甘い居心地
葡萄の汁が滴る手をそっとかざせばプールの
あとに目薬をさす夕暮れドクダミ揺れイトミ
ミズの気配木乃伊の光に照らされて夜を歩き
歩く蝉の幼虫の行列の末尾秋に鳴く蝉の穢ら
わしさおんがくの先生の小川流れていない小
川先生と遊びたいおんがく室の雑巾がけの縫
い目のいちいち猥雑に生えた黴の青さに目が
覚める怒る小川先生の小川流れていない顔し
か見ない糸屑の片口鰯の成績干物の要諦とか
らすのえんどう豆をそっとそっと噛み締める
瞬間接着剤の強力さゆびがくっついてくっつ
いてはなれないどうしてもはなれない大病院
に行ってもはなれない大手術してもはなれな
いはだかの小川先生のピアノの旋律のはだか

◆あいつも死んだこいつも死んだ

野口　裕

私でない誰かを主人公にすれば
私は隠れてくれるだろうか
そう思いながら一行目を記す
これは一行目ではないと
いつもの韜晦

死者を思いながら思わずと決めて
思い出の代わりに願望を書けば
なぜか死者の母御の娘時代が
夢に出てくる路地裏の
やりきれない循環

夕暮れの家並みのどこかから
カレーの匂いが漂うはずの鼻が
薄荷臭にだまされて
傷口が開くときに
御詠歌が始まる

噺家の追悼番組を録画してあったのを
久しぶりにかけてみると
つっかえつっかえ喋っている晩年があった
循環は繰り返すのだけれども
衰えつつ繰り返される

さんてんいちよんいちきゅう
ごおにいろく
ごおさんごおはちきゅう
ななきゅうさんにいさん
以下略

◆いくたびも鉄の橋を

木澤豊

大きな半円の鉄橋を渡りながら　はっ
おれ　むすうの骨の上を渡ってんでねえか
黒く焦げた人や位牌や
着物の破片とか
なにかわからないものが散らかっていた
そんなものが焼けて　すっぱい匂い
火の後を通ったら
あ
七十年　八十年　なんなんだ
それ　あったんか　なかったんか
ぬれた衣類やら紙束の積み重ねが
溶けかけている
解かれずに
とかれずに
さ
痛い
大きな半円の鉄橋の下に
ひとの影が何人だろう

頭を寄せている
空が青黒くなって
われに　むすう
火がともった
いのちの痕跡みたいに
切り通しの焼けた石垣の影
さ
行く旅も　深い　鉄の橋に
一つ　菜の花　咲いた

◆みなしうたが聞こえる

木澤豊

ヨナを抜いて軽い耳鳴りをきいて
あたまの芯の声をはずしてトシくった
うちのまえに白い花がさいて友人がひとり
　きえて
ふいと
たよりが途絶えた男もいて
なあ
電話のベルがあたまにひびくなあ

庭においたサザエとアワビとが
白てふ貝のかけらとか黒土にまみれて
みんな身なし殻なんだが
といふほどだったんだ
て　なにのこるんかな
残んない
ほら
八十年前
玄関と運河のあいだ
オシロイバナが花いっぱい咲いてた
まぼろしでもよいとしを　とって
借家のうらを日暮れの電車の音がとおった
むかし　さな
錆のにおいして
ガード下で火事だとだれかが叫んだ
台所の窓ガラスが　赤い
ひさしのブリキの樋が裂けて少し垂れ下が
　って
ゆれている
みんな　みなし　から　なんだか
古いうたが聞こえる場所は
もう　ない　かな

◆その水路

大橋愛由等

締まりの悪い三角窓の隙間から
透明すぎる雲が侵犯しようと
かたかた悲しい音をたて
抒情過多なシーニュを送ろうとしているとき
直角の風がきまぐれに
ぼくの目の前でエポケーして
螺旋を忌避するかのようでいて
きまって奇数の時刻、奇数の日に
三角窓の周縁を
飛行船と斑蝶がさまよっているので
フランス装をあけるペエパアナイフで
三角窓に疵をつけ
二・八ミリほどこじ開けると
初春の質料と形相が混濁して
風と風とが無為に咆哮しあい
モノとモノ事と事との距離が
奇天烈に撹乱しはじめ
分度器では計測できなくなって
コンパスを無思慮に拡げても
その水路を超えることはできず
せめてナイフとフォークの区別をつけ
世界時計が止まっていないかどうか
聖者の通り道の上空を
烏たちが今朝も無比に飛んでいるのか
群体であるところの月影を
為政者は踏み絵として使用しているのかどうかを
斑蝶が毎夜毎夜語りかける赫石に
問いかけ
感応を待っている間に
月影が飛行船に喰まれているその有り様を
ぼくはもう春が破綻する前から
三角窓から見ていて
すこし泣きたくなり
バルコーンに移って
泣き真似をするため
虚空を見上げると
分度器が世界を解釈しようとしていて
風と風モノとモノとが
月影との化学培養で
いつ液状化するのか予測したり
コンパスが水路を超えるための
木橋に付帯させる註を
筆記するための羊皮紙を
飛行船に使い走りさせて
螺旋な都市の小商店で
入手しようとしていたりするのだが
その都市は三角窓やバルコーンから
どの方角に位置しているのか分からず
そこに棲む斑蝶は
ぼくが月影が液状化したあとに
ラ・フランスとともにミキサーにかけ
毎朝呑むことですこしでも早く群体に
純化しようとしていることを
許容してくれるのかどうか
知っておきたい
のだが

◆益田っこ通信 58号

元（はじめ）正章

▼コロナ禍の平和の鐘〈2021.03〉

「誰がために鐘は鳴る」これは57号のタイトルでした。まことに、いったい誰のために鐘は鳴っているのか。そのことに想いを馳せた時、礼拝は、宣教は誰のためにあるのかと、自らを顧みました。自分の考えではなく、神の言葉を伝えるのが牧師としての職務であり、それ以外は邪道というのが、この世界の基本的認識です。なのに、逸脱して余りある確信犯を行い続けてきました。

益田教会に来て、はや5年を迎えようとしています。まったく縁も所縁もない新天地に赴任して、ゼロからの出発。それがここに骨を埋めるべく、〝人生の終焉〟をこれからは嬉しく明るく過ごそうとしているのですから、老いさらばえるなど、ゆめゆめ考えられません。

「人口拡大」「地方創生」という標語が空しく響く中で、「少子高齢化」は確実に進み、数十年後には、島根県自体が消滅してしまうとも言われています。なのに、ここの人たちは危機感が希薄なのです。ここが一番住みやすい、のんびりしたところなのです。よそ者の目から見れば、「このままでいいはず」はないのに、なぜか皆さん、良い人が多いのです。新しいものよりも、今も古いものに価値が置かれています。そこが地方の良さでしょうか。見知らぬ者に対しても、道々顔を合わせば、自然と挨拶が交わされます。「自然営為」に溶け込むことができたのならば、ここは「人生の楽園」ともなるでしょう。

新年度を迎えて、「平和の鐘」を鳴らすことにしました。「天使のいざないの標」が、益田の町にうるおいを届けますように と祈ります。

〈編集部註／この「益田っこ通信」は、島根県益田市にある日本基督教団益田教会の牧師である元正章氏（神戸市出身）が月間で発信しているハガキ通信を転載したものです〉

大西隆志　想像力の彼方に〈3〉

中学一年までだった。母里と呼ばれる土地で物心つくまでの時期、印南野台地東側の溜池の多い加古郡稲美町の古くいえば母里村蛸草という場所で育った。母親の実家で田舎の子どもとして、祖父、祖母は明治の人なのでその時代の帯びている感性の元で育てられた。加古川には家があったが、はっきりした事情は分からないながら、母里幼稚園、母里小学校、そして母里中学校の一年生まで、モリという音を掲げた学校に通った次第。実をいえばこの母里の土地の影響を僕は強く受けている。

地平から陽が昇り、地平に陽が沈むのだ。印南野台地でもあり、条件の良い蛸草から北東の方角には、雄岡山、雌岡山があるが、視線を遮るほどに大きさはなく、どちらかといえば逆三角形のオブジェのように地平にぽこっと二つ並んでいる。この風景は溜池と共に、子どもの僕の世界認識に影響しているように思う。それと祖父が日露戦争の帰還兵だったので、満州の話や写真帖もあり、中国大陸の地平線のイメージが焼きついていたのかもしれない。二重に結びついていたことで、ある種の大陸的な感受性の一部でも僕にあれば面白いのだが。

西に沈む大きな夕陽には、西に位置する加古川の実家への思いもあったのかも知れない。想像力のベクトルは西方に向いていたようだ。西への憧れとして、風土が及ぼしてくる固定された夜への逸脱をも含んだ、それらの孕んでいる認識の仕方には夢の顕れも含まれているようだ。どうしてなのか、「実の在り方」とはリアリティのことだが、土地の在り方から離脱したいのにしきれないほどの縛りは、体内時計のように体内方位なる基準軸があったからかもしれない。僕にとっては余所者としての母里であり、加古川でも母里の背景を抱え疎外感を少し感じていた。中心が定まらないことは、「楕円の思想」として、生来の僕のアイデンティティには組み込まれていたのか、花田清輝はもちろん、小野十三郎の水平思考、垂直思考のように視点の自在さに惹かれていたようだ。

母里のことを書きながら、溜池にまつわる自作の詩篇がある。初めての詩集『綽名で呼ばれた場所』（紫陽社）に入っている「屈折率は気儘に走る」と題した行分けと散文が混ざっている詩型で、次のような一行があった。「自転車は溜池と水田の上を浮くように走っていく」と、意識的に書いた言葉ではなく、僕自身の何気ない無防備な眼差しを書いていたようだ。その後、詩人の安水稔和さんより「大西君の詩は地上数センチ上に浮いているようだ」と評されたことがあり、根を張るというよりはデラシネ的な自らの詩の在り方を指摘されたのかもしれない、と考えている。

どうつながるか、それは荒川洋治さんのエッセイ集『アイ・キューの淵より』（気争社）の帯に、「井坂洋子にしても大西隆志にしても伊藤比呂美にしても、戦後詩をまともに学習しているわけではないが、ちゃんとした詩を書いているではないか。先行世代のＩＱ高官たちがさかだちしてもかけないような、のびやかな、それでいて生活感のあるいいものを、ぺろっと書くのが彼らなのだ。だがこのひとたちはこのひとなりに、いろんな努力をしてるのだろうなあ、とは苦労人のわたしの見方である」、との本文からの文章がひかれている。荒川さんのセンセーショナルなる情況論なる散文は、当時の現代詩の動きに対する痛烈な投げかけだった。80年詩叢書の企画刊行を思いつかせてくれた事柄だったとあり、僕にとってもＩＱの高い既成の現代詩シーンからは、地上数センチを歩いたり、走ったりしていたのかもしれない。１９７９年に出た本なので、井坂さん伊藤さんらの登場は女性詩への展開の新しさにつながり、その後は詩の本質的な古典の言葉や口承文学への果敢なる挑戦を続け、今を代表する詩人たちでもある。

少し話を戻すが、最初の結婚の時は安水稔和ご夫婦に仲人をやっていただき、「地上数センチ浮いているのは、詩作品だけではなく大西君自身なのかもしれないね。物を書いたり、作ったりする人には恵まれた資質かもしれない」と言われた。確かに、母一人子一人の家庭環境は、フツウの人ではなく、処世術として多様な視点を持つことが、大層な言い方では生き延びるには有効な手段だったかもしれない。保護色を持っている動物や、擬態により攻撃を仕掛けたりするわけではないが、ＩＱ高官になるよりはそれらから下りたほうが、気が楽だし、生活感があることで独りよがりにならなくて、言葉が往還する。このことは目立たないようにすることではなく、自らの立ち位置を明確にすること。

ある種の個の在り方の訓練になったのは、デラシネと言うよりもディアスポラとしての困難を背負った人に影響を受けたことがおおきい。ドイツ思想研究者で詩人の細見和之さんの著書『ディアスポラを生きる詩人 金時鐘』に、引用したい箇所があった。「ディアスポラを生きる者が捨て去らねばならないのは、故郷と言語だけではない。通常の時間秩序の外に歩み出なければならないのだ」「ディアスポラを生きるということは何よりも、個に徹することこそが普遍につうじるという逆説を生きることにほかならないのではないだろうか」と。この本は金時鐘の生涯と作品を通じて、言葉と想像力による果敢なる挑戦であるが、ここから得られるものに僕らはどう共感し、対峙していけるのか。生活の細部に宿らせられることの希望は持ちたい。

思考を少しだけ柔らかくすると、うっすらでも見えてくるものがある。アメリカの現代美術家ブルース・ナイマンの「テープレコーダー」と題された作品。見た目は単なるコンクリート・ブロックが無造作に置かれているだけで、ブロックからは電気コードが出ている。作品の説明によると、コンクリートの塊の内部ではテープレコーダーがエンドレスに回っていて、そのテープには拷問を受ける人々の声が録音されている。この作品に接した人々は、録音された音声を想像力により、人それぞれが自らの思い描いたイメージが目の前のブロックを通し、頭のなかに作品が立ち上がってくる。そして閉ざされた牢獄の中から届いてくる無数の呻き声だ、と聴きとっていることにもなるのだ。

様々な個による想像力の多様な受容は、国家なりの集合的記憶の改竄や、個人的記憶の改竄に対して、雪崩をうつような情況なりを阻止し、それらを形成する場への影響を極力止めることができるように思っている。少しだけ自らの立ち位置（場）からの脱出や、そこからの踏み外しにより、自由な世界の可能性の領域は拡がり、普遍的に遍在する在り方を守って

◆脇道ソネット

大西隆志

身体にさす油はなんだろう
朝一番、自転車のチェーンに油をなじませ
朝食のパンとサラダと紅茶がぼくの油で
ウエスを握りしめながら納得してみる

問題は朝に集中しているようだが
ジュースと日々の情報には平穏な書割が用意され
人生の一齣一齣がチーズのように整列させられている
眠りから醒めない感情も鏡のなかで忘れられ

誰もがいくつかの困難な選択を抱えてはいるが
時々かたわらを通り過ぎる気配に教えられるみたいに
急に方向を変えてくる風が、なぜか心地よい

先を行く人の後ろ姿を消しゴムでなくすように
暮らしの脇へ、脇道へと入り込む冒険譚を胸に描いて
いたずら小僧の面影を残しながら世事に戻るか

◆残雪　詠

岩脇リーベル豊美

残雪や　連翹手折る雫音
Restschnee –
eine Forsythie abknicken
der Klang des Tropfens

春籠り　三日月廃墟に鍵をかけ
Frühlingsschlaf –
ein Halbmond sperrt
das verfallenes Haus ab

荊冠の傷　十字架道行きの炎
Die Wunde durch die Dornenkrone
– die Coronaflamme
auf dem Kreuzweg

シャーデンフロイデ　決定論の傷痕よ
Schadenfreude –
ist die Narben
des Determinismus

春河流る　つるんとした原発の横を
Des Frühlingsfluss
fließt neben dem
glatten Kernkraftwerk

地鏡や　はためく社会主義国家
Luftspiegelung
flattert feurig
im sozialistischen Staat

神戸詞（うた）あしび

148-2021.3.28 大橋愛由等

〈排耶書（はいやしょ）に込められたまなざしを考える

少年のころの思い出である。わたしはカトリック系の小学校に通っていた。コンヴェンツアル聖フランシスコ修道会が運営している西宮市にある仁川学院である。

高学年のある夏のことだった。岡山で行われた臨海学校に参加していた。その施設内で昼食をとった時のことである。食堂に集まり、いつものように食事前の祈りを始めた。われわれの小学校では一日に五回祈りを捧げる習慣があった。カトリックなので十字を切る。その食堂は大きく、われわれ以外にもいくつかの団体が食事をしていて、その祈りの姿は驚きをもって眺められていた。少年だったわたしはわれわれを取り巻くそのまなざしを強く意識し記憶にとどめたのである。

西宮市の阪急電車・今津線沿線は、仁川学院のようにいくつかのキリスト教系の学校が集まっていたこともあって学校を往復する日常ではことさら自分の〝異質性〟は意識しなかったが、時たま制服を着たまま地域社会に出向くと、地域住民から向けられる異質なものへのまなざしを感じていた。こうした視線を浴びていると、子どもなりに「視られる自分」を意識するようになる。ミッションスクールに通う子どもたちはこうして知らず識らずのうちに、子どもの頃から「視られる自分」を自覚して、自分を律していく習慣を身に付けていくのだ。

かつて私が通った仁川教会

「排耶書（はいやしょ）」と名付けられた一連の「反キリシタン文書」についての解説を読んだ（岩波思想体系25『キリシタン書　排耶書』のうちの海老沢有道「解説　排耶書の展開」（岩波書店、1970）。

「夫れ吾朝は神国成り。神は心也。森羅万象一心より出でず。……陰陽不測、これを神と謂ふ。この神、竺土にありては、これを喚びて仏法となし、震旦にありては、これを儒道となし、日域にありては、これを神道と謂ふ。神道を知るときんば仏法を知り、また儒道を知る」

この文章は1590（天正18）年、イエズス会司祭であるヴァリニャーノが少年遣欧使節を伴い、京・聚楽第で秀吉と会ったあとで、秀吉側からの返書に書かれたた文言である。日本（日域）はもともと神仏儒三教一体の国だから耶蘇教は受けいれられない、という拒絶のメッセージである。

16世紀から17世紀にかけて、「キリスト教と仏教という対蹠的哲学をもつ二大宗教の直接交渉は、日本においてのみ見られるところである」（海老沢）といった思想環境に置かれた日本の宗教界であった。当時、キリシタン側からの仏教を解析しようとする宗論的文章がいくつか残されているが、仏教側はそれに対する反論は積極的ではなかった。仏教側からキリシタンに対する「排耶書」がまとまって出始めたのは、江戸幕府がキリシタン禁圧政策を徹底して国内からパードレが追放され信者も表立って目立たなくなった17世紀半ばであったことも同書は指摘している。

こうした「排耶書」はいわば知識階級向けだったが、一般庶民に「排耶思想」が浸透したのは、当時流行していた仮名草子という通俗的教訓文学の普及が一役買っている。例えばそれは、〝南蛮大王〟が世界征服計画をたてて日本にバテレンを派遣し妖術を使うといった荒唐無稽な内容で今風にいえば陰謀論であるのだが、それが庶民に受け入れられ、反キリシタン意識が潜在化していったことは事実であった。

日本列島民にこうして植え付けられた「排耶思想」はその後も、幕末の攘夷論などで補強されながら、わたしが少年時代に感じたキリスト教に関係する者たちへのまなざしに連綿とつながっているのかもしれない。

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.160
神戸

2021年3月28日　通巻160号
発行所／月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人／大橋愛由等
maroad66454@gmail.com
定価600円(税別)